

みの MINO の EDO

東京⇄笠原情報誌 MAIL版

タイル名称統一
100周年記念事業

タイルピアノ お披露目式を開催！

7月21日(木)、「タイル名称統一100周年記念事業」の一環として制作されたタイルピアノのお披露目式が開催された。ピアニスト・はちまん正人氏らによる初演奏も行われ、来場は目と耳で音楽を楽しんだ。



世界で唯一!?タイルピアノの誕生

多治見駅北口・虎渓山広場の特設会場で、布で覆われたピアノがお披露目を待つ。快晴の下、真夏なみの暑さにもかかわらず、式典の開始時間の11時には会場におさまりきれない人数が集まった。

タイルピアノの制作は、「タイル名称統一100周年」の記念事業の一環として、多治見市美濃焼タイル振興協議会が企画。モザイクタイルアーティストの中村

ジュンコ氏が装飾を担当した。式典では同協議会会長・糠野嘉則氏が挨拶。企画運営委員長・宮川憲市氏が企画の主旨を述べた。「建物の壁や床に使われるタイルをもっと知ってもらうために、いろいろな場所に展示できるピアノを思いつきました。これまで絵を描いたり、色を塗ったりしたピアノはありましたが、タイルのピアノは初めてだと思います」。この後に予定されている初演奏をふまえ「ちゃんと音が出るのか、確認していただきたいと思います」と締めくくった。

次に多治見市市長・古川雅典氏が登壇。「駅舎、駅のトイレ、北庁舎にもタイルを使っています。多治見市全体をタイルの展示場にしていきます」とPR。最後に多治見市議会議長・石田浩司氏が祝辞を述べた。

次に多治見市市長・古川雅典氏が登壇。「駅舎、駅のトイレ、北庁舎にもタイルを使っています。多治見市全体をタイルの展示場にしていきます」とPR。最後に多治見市議会議長・石田浩司氏が祝辞を述べた。

次に多治見市市長・古川雅典氏が登壇。「駅舎、駅のトイレ、北庁舎にもタイルを使っています。多治見市全体をタイルの展示場にしていきます」とPR。最後に多治見市議会議長・石田浩司氏が祝辞を述べた。

次に多治見市市長・古川雅典氏が登壇。「駅舎、駅のトイレ、北庁舎にもタイルを使っています。多治見市全体をタイルの展示場にしていきます」とPR。最後に多治見市議会議長・石田浩司氏が祝辞を述べた。





笑顔の花を咲かせたい

関係者が舞台上に出揃い、「除幕セレモニー」を開始。ピアノにかけられた布が取り外され、色とりどりのタイルで飾られたピアノの姿が現れると、会場から歓声が上がった。

「コンセプトはフラワーサークルです」と制作を担当した中村氏。「心が丸くなる、笑顔の花が咲くという意味を含めました。タイルは実用的な建材でありながら、心を華やかにしてくれるもの。このピアノを、タイルを愛していただくためのツールとして役立ててもらえたら嬉しいです」。

目と耳で演奏を楽しんで

実演では、最初に市内の小学生の姉妹が「人生のメリーゴーランド」を連弾。次に市在住の女性が「旅愁」「帰れソレエントへ」を演奏した。最後にピアニスト・はちまん正人氏が「オペラ座の怪人」「ラブソディ・インブルー」を演奏。来場者はタイルピアノが奏でる旋律に耳を傾け、演奏者たちに大きな拍手を贈った。

演奏後、はちまん氏はピアノの前に「感性が刺激されますね」と笑顔を見せた。「名称統一100周年」にちなみ、自身のピアノや演奏曲も100年前に制作されたものと触れつつ、「いろんな方と交流しながら、温故知新でやっていきたいです」と語った。式典終了後は記念写真を撮ったり、細部を見に来たりする人がピアノに集まり、まさに“笑顔のサークル”が生まれていた。

タイルピアノは今後、全国を巡回する予定だ。



側板部分

いちょう形、葉っぱ形、六角形、三角形など様々な形状のタイルが集合。



下前板部分

足が当たることを考慮し、大きめのタイルを配置。万華鏡のようにも見える。



タイルを張れるスペースがまだ残されており、将来的に張り足す予定



「長く使えるように、強く美しく仕上げました」

モザイクタイルアーティスト 中村ジュンコ氏

神奈川県鎌倉市にあるアトリエにピアノが搬入されたのは今年3月。約4カ月かけての作業となった。

ピアノをタイルで飾るという初の試みの苦労や工夫とは？ (式典でのコメントより)

*運搬での苦労

アトリエは駐車場から50mほどの距離があり、260キロのピアノを運んだ業者さんには頭が下がりました。

調律士の方に張ってはいけない場所を聞くと、調律の際に開閉する上部(屋根)以外は大丈夫とのこと。上前板と下前板は外せるので、細かい作業ができました。運搬の際に持つ部分は張れないので、半分程度は、多治見に運んだ後に作業をして完成させました。タイルを張った後のピアノは330キロくらいになったと思います。

*タイルの形と厚みを生かして

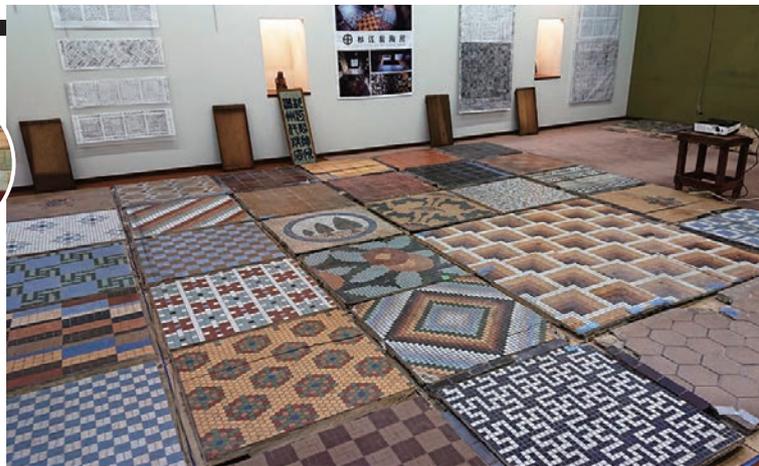
タイルはなるべくカットせず、そのままの形を生かしています。光が反射してひかって見えるようにと、厚みが違うタイルを並べて、表面に高低差をつけました。下前板は、演奏者の方の足が当たることを考え、はがれにくいように大きめのタイルを配置しています。長く使ってもらえるように、強く美しく仕上げました。



見本室タイル 救出プロジェクト

～活動のきっかけから保存の実現まで

戦前のタイルの意匠を今に伝える95年前の見本室タイル。消失の危機にあったが、多くの人のおかげで保存が実現した。今年4月の見学会実施を機に、保存活動をスタートさせた加藤郁美さんに、活動の詳細について伺った。



とこなめ陶の森資料館での再現展示の様子。(写真:福井淑江)

—保存プロジェクトを始めた経緯は？

2018年に、緑にうもれた巨大な木造工場に偶然出会って、この旧杉江製陶所タイル見本室を見せていただきました。そのとき楽しくお話しした杉江重剛社長が2020年に他界なさって、今年の5月には工場を解体する、ということをご家族に伺ったのが昨年11月。このままほんのひとにぎりのタイルマニアが見ただけで見本室が消えてしまうのは惜しいと思い、4月に見学会を開きました。すると、非常に反響が大きく、「残らないのはさみしい、とただ言うだけじゃなくて、残すために何かやってみよう。出来るかもしれない」という気持ちがありました。

—活動はどうやって広がったのでしょうか？

保存というのは、結局は解体資金と受け入れ先なんですね。おかげさまで見学会やクラウドファンディングで多くのご支援をいただき、資金のほうは順調に集まりました。クラファンの1日目に目標額に達しまして、結果的に1001人の支援者、428万円の支援金を達成できたことにはたいへん驚き、ひじょうに有り難く思いました。

支援が広まるきっかけはSNSでしたが、東海地方の新聞やTVが継続的に取り上げてくださり、地元の反響がだんだんと大きくなりました。とにかく鬱蒼とした大きな工場だったので、「ここは何だろう」となんとなく思っていた方も多かったようで、「緑の中にこんな美しいタイルの見本室が95年も存在していた」という驚きが、みなさんの心を惹きつけたのではないかと思います。

杉江製陶所見本室タイルは、床の無釉モザイクタイル模様パネルが73種類、腰壁の施釉陶器質タイルパネルが24種類、総面積70.5平米もあったので、たとえその全てを活かし取り出せたとしても、収める先があるなんて普通では考えられないことでしたが、常滑のタイルは常滑に残したいという地元の方々や、全国

「旧杉江製陶所 見本室タイル」について

愛知県常滑市で大正から昭和にかけ、タイルを生産した杉江製陶所。戦後は東窯工業として砥石の製造に転業したが、敷地には当時タイルの見本室としても機能した事務棟が、床一面のモザイクタイルの模様張りパネルとともに95年間そのままの姿で残されていた。昨年の廃業にともない建物の解体が決定。見本室のタイルも消失の危機に瀕したが、有志により「救出プロジェクト」が発足。クラウドファンディングを実施するなど保存活動を展開した。7月に無事に救出がなされ、このたび移設先も決定した。

の常滑ファンの方たちのお気持ちが事態を動かしてくださったと思います。

—印象的だったことは？

ひとつは、京都で解体前の建築レスキューをしてきた本間智希さんたち風土公団と、常滑の建築家・水野太史さん、そして多治見の^{はつり}斫師、松永晃尚さんが力をあわせて、見事なタイル活かし取りをしてくださったことです。松永さんは多治見市モザイクタイルミュージアム開館準備の収集活動の際、元理事の安藤隆望さんといっしょにタイルの活かし取りをしてきた方で、すばらしい腕前でいらっしやいます。安藤さんと、多治見市モ



4月に続いて開催した、5月連休の連続見学会にはのべ352名が参加。左は見本室でタイルの解説をする加藤さん。「にっぽんのかわいいタイル」(国書刊行会)の著書でもある。

ザイクタイルミュージアム代表理事の水野雅樹さんをご紹介いただきました。産地が主体になった産業遺産保存の大先輩の方々に応援していただけてとても嬉しかったです。

もうひとつは、保存活動の中心が、東京や京都から馳せ参じたわたしや本間さんから、杉江家の明子さんや坂野俊哉さんほか知多半島在住の実行委員会メンバーに移っていったことです。杉江家は戦後はタイルではなく砥石を製造していたので、明さんは最初、「タイルのことはよくわからないんですよ」とおっしゃっていたのですが、どんどんタイルへの理解を深めると同時に、保存のための外交官として果敢に交渉なさるようになっていました。「タイルは美術品ではなく、工業製品です。わたしどもが作ったタイルが生活の一部になることによって、みなさんが楽しい気持ちで過ごしていただければとても嬉しいです」と明さんがインタビューに答えているのを聞いたときには、心をうたれました。わたしも、大量生産品であるモザイクタイルの無名の美が、名も無い人々の住居を愛らしく飾って心を豊かにすること、それこそがモザイクタイルというものの本質だと思ってきたからです。

——現在、常滑で再現展示が行われています。

常滑の窯業の歴史を伝えるとこなめ陶の森資料館で大がかりな展示をさせていただけることになったのも、地元の方々のご尽力のおかげです。クラファン支援者のみなさんから「無事に切り出された見本室タイルに早く会いたいです」という声をたくさん寄せていただいておりますが、まさかこんなに早く実現するとは(笑)。この夏、常滑市は国際芸術祭「あいち2022」のサテライト会場になっていて、わたしたちの展示もたくさんの方々に観ていただいています。

——見本室タイルの受け入れ先は？

今展示している無釉モザイクタイルは保存活動の実行委員の1人である常滑の建築家、水野太史さんが改修設計をする常滑市のワークセンター梶間の前庭に設置されます。授産施設の利用者の方々が作ったパンや焼き物売るショップの入り口でお客さんを迎えることになるということです。

腰壁の施釉陶器タイルは、保存活動を最初からバックアップしてきてくださった陶の森資料館の学芸員、小栗康寛さんのご尽力で、陶の森資料館に収蔵・展示していただくことになりました。

——みなさんに伝えたいことは？

いのうえ@西表さんのSNS投稿が心に残っています。「自分もイザというときには大胆になにかを救うべく立ち上がらねばならない時が来るかもしれない。その時に迷うことなく最適な行動がとれるよう皆様の活動から学ばせていただこう、という下心も持っております」「なので、後続のためにも無理なく気持ちよく完遂していただけますようお願い申し上げます」。ほんとうにそのとおりで、無事タイルを収め終わるその時まで、現実的に、率直に、そして時には大胆に決断して責任を果たしていきたいと思っています。

95年前の見本室タイル再現展示

会場：とこなめ陶の森資料館 2階講座室
愛知県常滑市奥条7-22
開館時間：9:00～17:00
休館日：月曜(祝日の場合は翌日)

開催中
10月10日
月まで



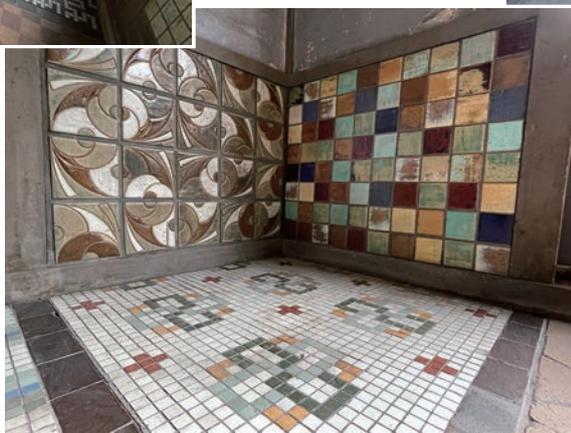
杉江製陶所「見本室タイル」
緊急救出プロジェクト実行委員会
<https://sugicrayworks.wixsite.com/tile>



無釉モザイクタイルのパネルが敷き詰められた第1見本室。6月の解体寸前まで事務所として使われていた。



95年前に建てられたタイル見本室外観。



腰壁の施釉タイル。布目の窯変、型取りのモダンデザインが見事。

緑に覆われた八角煙突と四角煙突は、工場の象徴的な存在。





TAJIMI
CUSTOM
TILES

ミラノサローネ国際家具見本市
毎年4月に開催される家具・デザ
イン関係で世界最大規模の見本
市(今年は6月に開催)。本会場は
「ロー・フィエラ・ミラノ」と呼ば
れる広大な展示場だが、同時期にミ
ラノ市内の各所では企業やデザイ
ナーが独自に企画する展覧会が
開催される。「フォーリ・サローネ
(サローネの外の意)」と呼ばれる
それらの展示を含め、「ミラノデザ
インウィーク」と呼ばれる。



ミラノデザインウィーク2022 TAJIMI CUSTOM TILESが 初出展

6月7日～12日、イタリア・ミラノ市で開催された「ミラノサローネ国際家具見本市/ミラノデザインウィーク」(以下、ミラノサローネ)にTAJIMI CUSTOM TILESが初出展。同ブランドを主宰する笠井政志氏(エクシズ代表取締役)、建佑氏(同企画営業部部長)に出展の経緯や反響を伺うとともに、会場で注目したタイルを紹介していただいた。

TAJIMI CUSTOM TILES

岐阜県多治見市のタイルメーカー・株式会社エクシズが展開するブランド。多治見の複数のメーカーと連携し、オリジナルタイルを受注製作する。

きっかけは4年前のミラノサローネ

今回のミラノサローネは満を持しての出展。当初2020年に出展する予定がコロナ禍で開催中止に。2021年は出展を見送った。そもそも出展のきっかけは何だったのだろうか。

政志氏:2018年に佐藤オオキさん*1に誘われて、ミラノサローネを訪れたことが始まりです。30年ほど前に訪れたときと様変わりしていて驚きの連続でした。

会期中は、市内各地で様々な企業がインスタレーション形式の展示を行っています。トレードショーのように新商品を陳列するわけではなく、技術を見せるんです。たとえばトヨタ紡織は車のシートをつくる会社ですが、シートを用いた大きなオブジェを展示していました。どの企業もハリボテや簡易なものではなく、お金をかけて展示空間を作り込んでいて、「こんな世界があるんだ」と衝撃を受けました。

弊社は小さな会社なので社長の自分に決定権があり、興味をもって取り組んでくれそうな美大出身の社

員もいる。この新しいアプローチはそうした様々な“財産”や条件を生かせると考えました。

会場ではTAJIMI CUSTOM TILESのアートディレクターを務めるダヴィッド・グレットリ氏との出会いもあった。

政志氏:彼は日本びいきで、有田焼のブランドもディレクションしていて焼き物はすごく好き。今度はタイルに関わりたいと聞いて、「自分はタイル屋だから一緒に何かやろう」と盛り上がり、展示会場をどこにするかと、歩いて見てまわったんです。

帰国後に出展準備をスタート。TAJIMI CUSTOM TILESを立ち上げ、ミラノサローネの展示のコンセプトを「日本のタイルの可能性を伝える」と決定。マックス・ラム氏、イ・カンホ氏に製作を依頼した。

政志氏:展示は、オーダータイルによる表現の可能性を伝えつつ、クリエイターの創造意欲を引き出すものにしたと考えました。

*1 佐藤オオキ氏
デザイナー、建築士。デザインオフィス・neodoを主宰。
「nendo」はミラノサローネに毎年出展。

海外のアーティストに依頼したのは、ターゲットが海外だからです。日本好きのアーティストに、自分の使いたい作品を作ってもらおう。日本の文化・伝統が根底にありながら、海外のマーケットに調和する作品を作るのがねらいです。

マックス氏とカンホ氏には、実際に多治見に来てもらい、様々なタイルメーカーを案内しました。結果、マックス氏は鑄込みのメーカー、カンホ氏は、押出成形のメーカーを選びそれぞれの技法を駆使した作品を制作してくれました。

出展に向けた準備を終え、2020年のミラノサローネに出展すべく、ディスプレイを船便で送った後、開催中止の事態に。代わりに同年10月、二人の作品をギャラリー「MAHAL」(東京・表参道)で披露した。今回の出展にあたって新たに制作を依頼したロナン・ブルレック氏は、この表参道での展示の際、インスタグラムにメッセージをいただいたことが、そのきっかけとなった。

2022年6月、出展が実現!

紆余曲折を経て、ようやく出展がかなった今年のミラノサローネ。展示の反響は上々で、DeZeen誌*2の「見逃してはいけない12のエキシビション」にも選ばれた。建佑氏はそのときの会場の様子を語る。

*2 DeZeen誌
イギリスに拠点を置く、建築デザインウェブサイト。

建佑氏:最初は(12選に)選ばれたことに気づかなかったのですが、来場者が増えているな、と感じてはいました。サテリテ(若手デザイナーによる展示)を見学し、名刺交換をした際は「タジミさんですか!光栄です」と言われて。サテリテの出展者は会場に常駐し他の展示を見てまわれないので、ブランドが評判になっていたのだと思います。

会場では、製造工程や釉薬について注目が集まったという。

建佑氏:たとえばカンホ氏の作品について、「こんなに長いのになぜ曲がらないのか」と聞かれました。日本では製法に関して聞かれることはあまりないです。釉薬の濃淡にも驚く人が多く、「本当に美しい」と言われました。釉薬に関しても質問が多かったですね。ロナン氏の作品は、縦焼きしているのですが、トップの部分は釉薬が流れて薄くなっています。そこを見て「なぜこうなるのか」とも聞かれました。

ミラノのショールームを見学して思ったのですが、釉薬が均一でのおっぺりした色調のタイルが多いんです。こういう、色むらのあるタイルはあまり見ませんでした。その辺りに日本のタイルの可能性があるのではないかと思っています。そこをもっと追求していきたいですね。



笠井建佑氏



「SOSEIシリーズ」
ロナン・ブルレック

押出成形を用いた花瓶のようなオブジェ。「組成(SOSEI)」の作品名は、様々な色と形のパーツを組み合わせていることに由来。



「WORKING TILE」
マックス・ラム

立体的なタイルをパズルのように組み合わせた作品。特殊な釉薬を使用し、伝統的なタイルに見られる深い奥行きのある色合いを再現。



展示会場は、印刷工場を改修したギャラリー「ASSAB ONE」。天井が高く開放感がある。



「TIDE」
イ・カンホ

異なる長さの成形が可能なモジュールを縦横の両方向に重ね合わせ、かつ組み合わせた作品。



会場を訪れたロナン氏も、自らの作品を初めて目にし（ロナン氏はリモートで制作）「こんな色むらは初めて見たよ！」と多治見の釉薬表現を高く評価した。しかし窯変釉には難しさもある。

建佑氏: 窯変釉は、窯の中で色がどう変化するか、コントロールできないところがあります。「色が違う」とクレームにならないように、その辺りをお客様にきちんと伝えて、理解してもらうことが大切だと思っています。

おりしも今回3人のアーティストが選んだのは鑄込みや押出成形といった昔ながらの製法だった。世界で大型プリントタイルなどの最新技術がしのぎを削る中、手作り感や焼き物らしさが日本のタイルの強みになると考える。

政志氏: 日本でも色むらを表現する還元焼成や鑄込みや押出成形といった湿式製法による焼き物らしいタイルが少なくなっています。そうした中、色幅などを

理解してもらう努力をしつつ、売っていくことが私たちの使命と考えています。

ミラノサローネが終了して3カ月。「どうやって受注に結びつけるのが至難のわざです」と話しながらも、「ほかでは得られない経験ができました。費用はかかりますが、いい授業料ですね」と政志氏。今後も隔年で出展したい、と前向きだ。ミラノの効果を待たず、内装で使う特注タイルの受注は増えているといい、来年3月にオープン予定の新宿「東急歌舞伎町タワー」は、インパクトのあるタイル空間が誕生するという。多治見のタイルが世界で見られる日も近そうだ。

ロナン氏による作品の凱旋展示を開催！

Tajimi Custom Tiles TOKYO 2022
An installation by Ronan & Erwan Bouroullec

期間: 10月29日～11月6日 Open 11:00～18:00

場所: LICHT Gallery (リヒトギャラリー)

東京都目黒区青葉台3-18-10 2階

ミラノサローネにみる

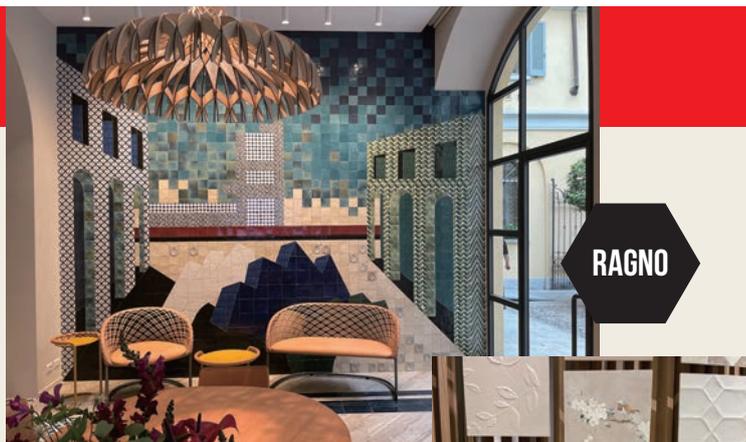
イタリア・タイル最新事情

世界のデザインをリードするイタリアは、タイルの本場でもあり、多くのメーカーが出展。会場をめぐって見つけた注目の展示や最新技術について紹介いただいた。



MUTINA

多くのデザイナーとコラボレーションしたタイルを手がける。むらのない鮮やかな色合いが現代的。



RAGNO

MARAZZI社の姉妹ブランド。ハンドペイントのタイルによる壁画作品。遠近感の表現も面白い。右はインクジェットプリントで装飾を施したタイル。



MARAZZI

20ミリ厚の大判タイルに特化したブースを展開(下)。大判タイルの下にIHコンロを仕込んだクッキングヒーター(左)。

技術トレンドは
インクジェットプリントと
大判タイル



LITHEA

シチリア島で採れた大理石を用いた立体感のある石材タイル。

